

# 移動動詞に見る物理的空間の主観的把握 —「出る」「入る」「横切る」を例として—

鷺見 幸美

## 1. はじめに

客観的にその生起が確認できるような「移動」という事象であっても、「言語化された移動」は話者が主観的に概念化したものである。つまり、「移動動詞」の意味は、認識の対象とされる「移動」そのものに内在するのではなく、話者がそれをどう捉えるかにある<sup>1)</sup>。移動動詞の中でも、次節で詳述する「経路位置関係を包入する動詞」については、移動の主観的把握の基盤に「物理的空間の主観的把握」がある。つまり、経路位置関係を包入する動詞の使用には、「話者が物理的空間をどう捉えるか」が反映されているのである。本稿は、現代日本語の移動動詞「出る」「入る」「横切る」を例に、我々が「物理的空間」をいかに主観的に捉え、移動を言語化しているかを見て行くことを目的とする。

## 2. 移動動詞

### 2.1 移動動詞の基本性

移動表現は、言語表現の中でも極めて基本的なものとして位置づけられている。例えば、松本(1997:126)は「多くの学者が指摘するように、移動表現(あるいは空間表現一般)は言語表現の中でも最も基本的なものの1つである。このため移動表現の研究は、広く言語表現一般の性質を知るための重要な手がかりとなり得る。」と述べ、影山・由本(1997:129-130)は「移動を表す動詞は、おそらくどの言語においても最も基礎的な語彙に含まれ、より複雑な事象や抽象的な状態を表現するための土台になるという点で重要な意義を持っている。そのため、移動動詞に関する研究は、理論的な枠組に関係なく多数なされてき

た。」と述べている。

では、「移動」とはそもそも何であろうか。松本（1997）では以下のように定義される。

移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化である。したがって移動には移動物、移動の経路、そして移動の継続時間が存在する。この3つが移動を規定する必須要素である。（p.128）（下線引用者）

しかし、以下の例では、物理的空間における「物体の位置の変化」が存在しないにも関わらず、移動動詞が用いられている。

- (1) 夜になってインターネットに接続をしてみた。想像していたのとは異なり、殺風景な画面が表示され、グレーの背景に黒字で、装飾のない文字が並んでいた。教えてもらった通りの手順でページを移動していくと、センスが良いホームページに辿り着く。そこまで行くのに一時間はかかった。（伊坂幸太郎『ラッシュライフ』新潮文庫 p.86）<sup>2)</sup>

このような例の存在が、移動表現の基本性を示している。我々人間が「インターネット」を駆使するようになったのは、比較的最近のことである。インターネットの登場とともに、それを理解する必要、それを言語化する必要が生じた。

「移動」という「わかりやすい」事象が、インターネット上で展開される「わかりにくい」事象を理解・言語化する「土台」となっているわけである。

では、なぜ「移動」はわかりやすいのか。我々人間の視覚は他の感覚に比べ発達しており、「物体の位置の変化」は視覚的に捉えることができる。さらに、「移動」は、我々人間が自分の身体を使って、小さな頃から繰り返し経験するものである。我々にとって、非常に日常的で、基本的なことである。だからこそ、わかりやすく、言語表現の中でも「基本的」「基礎的」という地位を付されるのである。

しかしながら、わかりやすい「物体の位置の変化」とはいえ、それを言語化する際に話者に選択の余地がないというわけではない。話者は主観的に「物体の位置変化」を捉え、言語化するのである。本稿は、移動動詞が「物体の位置の変化」を表す場合を考察対象とし、その主観的把握のあり方を見ていくもの

である。それは、移動動詞の基本性ゆえ、我々の外界把握のあり方を考察することにつながると考える。

## 2.2 経路位置関係を包入する動詞

松本(1997)は、「経路位置関係を包入する動詞」を以下のように説明している。

移動の動詞は移動の事実を表現するが、そのほかに様態や経路位置関係などを同時に表現することが多い。このような場合、様態、経路位置関係などが移動の事実と共に1つの動詞に包入されている、あるいは、語彙化されている、という。(p.130)

移動の様態を包入する動詞が多い英語に対して、日本語の基本パターンは移動の方向性や経路位置関係を動詞に包入するものである。(p.141)

その上で、日本語の「経路位置関係を包入した移動動詞」として、以下の21語を挙げている<sup>3)</sup>。

越える、渡る、通る、過ぎる、抜ける、横切る、曲がる、くぐる、回る、巡る、  
寄る、通過する、入る、出る、至る、達する、着く、到着する、去る、離れる、  
出発する(同上)

本稿は、このうちの「入る」「出る」「横切る」に包入された経路位置関係を考察し、移動の経路である「物理的空間」がそれぞれどのような特質を持つかを見る。そして、その特質が「物理的空間に内在しているもの」ではなく、「話者により主観的に捉えられたものであること」を明らかにする。

## 3. 「入る・出る」

小泉(他編)(1989)では、「入る」を「外部からある場所の内部へ移動する」(p.411)、「出る」を「中から外に移動する」(p.345)と記述している<sup>4)</sup>。一般的にも、「入る」と「出る」は反義語として認識されており、それは、「入る」が「中から外へ」、「出る」が「外から中へ」という反対方向の移動を表すこと

による。しかし、以下の例のように、物理的空間を客観的には「中」と「外」に区別することができず、「入る」とも「出る」とも表現できる場合がある。

- (2) 駐車場から国道に {入ろう／出よう} とした乗用車が右側から来たオートバイと衝突した。
- (3) (愛知県を走っていて)  
この道をまっすぐ行くと、岐阜県に {入る／出る}。

「駐車場」と「国道」、「愛知県」と「岐阜県」のどちらが「中」でどちらが「外」であるかを定める客観的要因はない。また、「入る」か「出る」かの選択が、「中から外へ」「外から中へ」といった区別ではない、他の客観的な要因によって決まるものでないことも、以下の例において確認できる。

- (4) a. 前の車を追い越そうとして対向車線に {入った／出た}。  
b. 衝突のはずみで対向車線に {入った／出た}。
- (5) a. 太郎が庭に {入って／出て} 来た。  
b. 太郎が庭に {入って／出て} 行った。

(4) は、「移動主体の移動意図の有無」が使い分けの要因にならないことを示している。(4a) のように移動主体が意図的に移動したことが示される文脈においても、(4b) のように移動主体が意図しない移動であることが示される文脈においても、「入る」「出る」のいずれも使える。また、(5) は、「話し手の存在位置」が使い分けの要因にならないことを示している。(5a) のような補助動詞「来る」との共起は、話者が庭の中に位置している場合に「入って来た」「出て来た」のいずれも可能であることを示し、(5b) のような補助動詞「行く」との共起は、話者が庭の外に位置している場合に「入って行った」「出て行った」がいずれも可能であることを示している。

以上のことから、「入る」と「出る」の使い分けに、客観的な要因が存在するのではなく、その使い分けは話者に委ねられていると考えられる。しかし、その選択が全く恣意的であるとも考えにくく、何らかの動機付けがあるはずである。以下、その動機付けを探っていく。

ここで、以下の例において、空間名詞「中」「外」がそれぞれ何を指すか、考

えていただきたい。

- (6) a. 中で遊ぼう。
- b. 外で遊ぼう。
- (7) a. 田中さんは中にいるよ。
- b. 田中さんは外にいるよ。

さらに、以下のような最低限の文脈において、「入る」と「出る」のいずれが選ばれやすいか、考えていただきたい((a)と(b)には別の動詞を選ぶこととする)。

- (8) a. 校舎から運動場に {入る／出る}。
- b. 運動場から校舎に {入る／出る}。
- (9) a. 高速道路から県道に {入る／出る}。
- b. 県道から高速道路に {入る／出る}。

(6a)(7a)の「中」は「屋内」、(6b)(7b)の「外」は「屋外」として解釈されやすいのではないだろうか。また、(8a)(9a)では「出る」が、(8b)(9b)では「入る」が選ばれやすいのではないだろうか。まず、(6)(7)のように修飾語句を伴わない「中」「外」がそれぞれ「屋内」「屋外」として解釈されやすいということは、それが空間名詞「中」「外」のプロトタイプ<sup>5)</sup>だと考えられる。次に、(8)において、「屋内から屋外への移動」に「出る」、「屋外から屋内への移動」に「入る」が選ばれやすいということは、やはり「中から外への移動」は「出る」が表し、「外から中への移動」は「入る」が表すということが言えそうである。では、(9)のような「屋外から屋外への移動」を表す場合の「入る」と「出る」の選択は、何に基づいてなされるのだろうか。「中と外の区別」は関係しているのだろうか。

我々は、「屋内」というのは、次のような性質を持つ(ことが多い)ことを、経験的知識<sup>6)</sup>として蓄えている。

- (10) a. 出入りをするための出入り口を有している。
- b. 形があり、有界である。

- c. (屋外に比べて) 狭い。
- d. 何らかの目的を持って建設されていて、内側でその目的の行為が行われる。
- e. 太陽光や風雨から守られている。
- f. 世間一般の目が届かない。
- g. 際立ちが高く、注意を引きやすい。等等

このような経験的知識と、特定の物理的空間（「高速道路」「県道」）に関する経験的知識が、(9a)における「出る」、(9b)における「入る」の選ばれやすさを左右していると考えられる。「校舎と運動場」の出入り口である「昇降口」を「校舎」が有しているのと同様に、「高速道路と県道」の出入り口である「インターチェンジ」は、県道ではなく、高速道路の一部である。その結果、「高速道路」が「中」、「県道」が「外」として認識されやすくなり、(9a)が「中から外への移動」、(9b)が「外から中への移動」として言語化されると言える。つまり、「中」「外」というのは、客観的に定まったものではなく、(10)のような経験的知識を踏まえ<sup>7)</sup>、我々が主観的に定めるものである。このことは、以下の事例(11)(12)における「出る」「入る」の使用を説明できる。

- (11) 参加者の中には、後方の安全を確認しなかったり、一時停止をしないで狭い道から広い道に出たりする人がおり、注意を受けていた。(読売 2004.04.11)<sup>8)</sup>
- (12) 帝釈天の参道を通して、広々とした江戸川河川敷に出ると、演歌で有名な「矢切の渡し」が見えてくる。(読売 2003.12.22)

(11)(12)は「狭い空間」から「広い空間」への移動が、「出る」で表されている。ただし、この「空間の広狭」も絶対的なものではない。(12)のように、「参道」は「広々とした河川敷」と比べれば相対的に狭い空間であり、主観的に「中」として捉えられる。しかし、次の(13)では、同じ「参道」が「外」として捉えられている。

- (13) 山頂から北へ下り、中腹の土産売り場が並ぶ参道に出ると、その一角にガラス細工店「フック」がある。(読売 2002.11.10)

「山・山道」は、身動きがとりにくいという意味で狭い上、太陽光が届きにくく暗い、また、世間一般の目が届きにくい空間である。そのため、「山・山道から参道への移動」が、「中から外への移動」として捉えられていると考えられる。「入山」「山に入る」といった言語表現の存在は、「山」を「中」として捉えることが慣用化されていることを裏付けている。

さらに、次の例を見ていただきたい。

- (14) 白装束の集団「パナウェーブ研究所」の車列は九日午前十時すぎ、国道158号線の油坂峠を越え、岐阜県から福井県に入った。関連施設のある福井市を目指しているとみられる。(読売 2003.05.09)
- (15) 自宅近くの水田で土を耕していたが、作業を終え農道に出た際、運転を誤ったらしい。(読売 2003.03.12)
- (16) 事故は第二コーナーを過ぎ、直線に入る直前で発生。ボートの最高時速は約八十キロに達するという。(読売 2004.03.29)

「入る」が選ばれている(14)は、「福井県に移動して福井市を目指す」、つまり、「移動後の行動に目的がある」という場合であるのに対し、「出る」が選ばれている(15)は、「水田での作業を終え農道に移動する」、つまり、「移動前の行動に目的があった」という場合である。「福井県」「水田」は、「目的の行動が行われる」空間であることにより、「中」として捉えられやすくなっていると言える。(16)は、ボートレース事故を説明したものである。レースというのは、スピードにおいて他者に勝ることが目的であり、直線で加速されることを考えれば、「直線」が目的の行動が行なわれる空間であり、注意を引きやすい。このことから、「直線」が「中」として捉えられ、「直線に入る」と表されていると言える。

このように、我々は客観的には連続的な物理的空間にも主観的に「境界」を見出し、主観的に「中」「外」を区別する。そして、その主観的捉え方が、「入る」「出る」の選択に反映されていることがわかる。(2)(3)の例に戻れば、話者が移動元(「駐車場」「愛知県」)を主観的に「中」として捉えた場合には「出る」が選択され、移動先(「国道」「岐阜県」)を主観的に「中」と捉えた場合には、「入る」が選択されることになる。

#### 4. 「横切る」

影山 (1980) は、「横切る」を「対象物の主軸と垂直方向の移動」、「その物体の横軸と平行な移動」としている。また、国語辞典には「横の方向に通り過ぎる」という記述も見られる<sup>9)</sup>。これらの記述によれば、「横切る」の移動の方向は客観的な要因で決まることになる。しかし、次の例を見れば、「主軸」「横軸」「横の方向」が客観的なものではないことがわかる。

- (17) まん丸い形をしているから「まん丸公園」と呼ばれている公園が近くにある。時折自転車に乗ったままこのまん丸公園を横切る高校生がいて、小さな子供たちを遊ばせている母親たちをひやひやさせている。(作例)
- (18) 仁徳天皇陵の南に広がる大仙公園を横切ると、そこは墳丘のなだらかな優美な印象を受ける履中天皇陵。(読売 2003.09.28)

「まん丸」は「主軸・横軸」「横の方向」を内在させていない。「まん丸」に限らず、公園の形はさまざまに考えられ、客観的には「主軸・横軸」「横の方向」が定まっていないような形の公園でも「公園を横切る」と言える。公園の形そのものの特徴に基づいて、「横切る」方向が決まるわけではない。さらに、次の例を見ていただきたい。

- (19) 新八代駅では、新幹線と特急は同じホームに停車したが、移動距離は最短で約十メートル。互いの車両の長さが異なるため、斜めに横切らなくてはならない乗客も出てくる。(読売 2004. 03. 13)

ホームの形は「軸」を認識しやすいものではあるが、「ホームを斜めに横切る」ということは、「主軸」「横軸」を無視することになる。つまり、客観的な要因によって、「横切る」という移動の方向は決まらない。では、話者はどのように移動を捉えたとき、「横切る」を用いて言語化するのだろうか。何らかの動機付けがあるはずである。以下、その動機付けを探っていくこととする。

まず、以下の例において、どのような方向の移動が表されるか考えていただきたい。

- (20) a. 道路を横切る。  
b. ホームを横切る。  
c. テニスコートを横切る。

「道路」「ホーム」「テニスコート」については、客観的に「相対的に短い方向」と「相対的に長い方向」が決まっており、(20) で表されるのは、一般的に「相対的に短い方向」の移動である（(19) のように、ホームを斜めに横切る場合であっても、一般的には「相対的に短い方向」に斜めに移動することが想起されるであろう）。しかしながら、この移動は、「相対的に短い方向の移動」であると同時に、「(車や人、ボールといった) 物体の移動が想定でき、その軌道と交差する軌道を描く移動」でもある。さらに、次の例を見ていただきたい。

- (21) 流れを横切って泳ぐには、上流に対して四十五度、対岸方向に体を傾ける。  
(読売 2003.11.25)
- (22) また、交通頻繁な海域を夜間に横切る時、自動操縦装置に切り替えたまま見張りを怠って衝突事故を起こした遊漁船もあった。(読売 1997.08.02)
- (23) 紗野さんは、寺田さんの後を約五メートル離れて滑っていたという。細井さんは、寺田さん親子の間を無理に横切ろうとしたらしい。(読売 2004 01.10)

(21) (22) (23) の例は、「(水の流れ、船、スキーヤーといった) 物体の移動が想定でき、その軌道と交差する移動」を表すという点で (20) と共通している。次の例も同様である。

- (24) 犬を連れた女性は、横断歩道を横切って反対側の歩道へ渡ろうとしていた。突然、その犬が私のほうへ向かって歩きだした。女性は手に持っていたリードを引っ張られて、転びそうになりながら戻ってきた。女性がこちらの歩道に戻ってきた時には、反対車線から車が歩道を走るようにつっこんできて、タイヤをすべらせ、信号機にぶつかり、すさまじい音をたてた。「イヌのいる風景 Vol. 6ーカフェの犬ー」 <http://www.cwa.jp/cawa/200711.html> )<sup>10)</sup>
- (25) 歩行者用信号が青なのに、左折車や右折車が横断歩道を横切り、ヒヤリとした経験はありませんか？ (「宮城県警察交通管制ニュース」

<http://www.police.pref.miyagi.jp/hp/kisei/news/news.htm>

(24) と (25) の「横断歩道を横切る」は、その移動の方向が異なる。(24) の歩行者の移動は「横断歩道に平行する移動」、(25) の車の移動は「横断歩道と交わる移動」である。すなわち、「車の移動の軌道と交差する移動」、「歩行者の移動の軌道と交差する移動」であり、「横切る」が「物体の移動が想定でき、その軌道と交差する移動」を表すことに違いはない。

しかし、次の例では、「横切る」軌道が他の移動の軌道と交差するわけではない。

(26) のんびり座っている当方の目の前を、空席を探す客がおかまいなしに横切り、ついには足を踏んづけられてしまう始末に。(読売 1996.08.28)

(27) 両国の国技館にほど近い同愛記念病院。朝のロビーには、鬢(びん)付け油のおいを漂わせ、診療開始を待つ力士の姿も見える。その外来患者たちの前を、資料を小わきにした医師たちが足早に横切っていく。(読売 1997.02.20)

(26) (27) の例では、「座っている人の前」を移動することが表されており、「横切る」ことによって、他の移動の軌道と交差するわけではない。この「横切る」は、人間の進行方向を踏まえている。人間の進行方向が(基本的に)前方であることを想定すれば、「一(人)の(目の)前を横切る」で、「一(人)」の進む軌道と交差する移動」を表すと言える。

この(26) (27) からは、言語表現が我々の身体、認知能力に動機づけられていることを確認することもできる。まず、我々人間が「想定する能力」を備え、「我々の身体が非対称的である」ために、人間の進行方向が基本的に前方であると想定できる。また、我々が「他の人から見れば」というように「(自分以外の他者に)視点を移すことができる能力」を備えているために、「他者の前」「他者の進行方向」を想定できる。

続いて、「空中移動」の表された例を見ていただきたい。

(28) 買い物の途中、目の前を虫が横切った瞬間、スズメが空中キャッチ！(読売 2003.10.08)

- (29) 天文研究グループの一員として観測していた際、西寄りの天空に輝く木星にレンズを向けていた午前三時ごろ、左上方から右斜め下に横切る流れ星を偶然撮影した。(読売 2001.11.30)

我々人間は（高い所に上がったり、低い所に下りたり、あるいは、乗り物に乗ったりするのではなく、足を浮かせるようにして）自らの力だけで上下方向に移動することはできず、(28) (29) のような「空中移動」は、「人間の進行方向と交差する」とは言えない。しかし、道案内矢印「↑」が前方に進むことを示すように、前後方向は上下方向に転写される。したがって、(28) (29) で表される左右方向の移動は、人間の進行方向と交差する移動ということになる。

さらに、次において、どのような移動が表されるか考えていただきたい。

- (30) {グラウンド／運動場／広場／居間} を横切る。

「グラウンド」「運動場」「広場」「居間」は、「移動のための空間」ではなく、必ずしも「物体の移動」が想定できない。(26) (27) と異なり、「人間の進行方向」を想定しているとも言えない。例えば、次の例では、「ガランとしたグラウンド」が移動領域であり、言語化されている移動の方向は一通りではない。

- (31) 捕手役のひとりを残して全員が元気よく一塁守備位置へ。エラーしたら、できるまで繰り返すノック練習。それでもすぐに自分の順番が回ってくる。なんせノックを受けているのは四人だけなのだから一。ガランとしたグラウンドを横切って、今度は全員が遊撃手になった。(読売 2002.06.14)

(30) で表される移動は、「他の移動」を想定し、その軌道と交差する移動を表しているのではない。この移動は、「移動領域の形状」や「移動の方向」を問わず、中心（に近い部分）を通る移動だと言える。そして、本来中心部分は「移動」のための空間ではない。野球をしたり、鬼ごっこをしたり、団欒をしたりする空間である。(31) においても、「グラウンド」は野球をするための空間であり、守備につくための移動はあくまでも野球をするための準備である。

「横切る」が「他の目的での使用を主とした空間を移動領域とする移動」を表すことは、以下の例でも確認できる。

- (32) 同省や県教委によると、男子生徒が放課後、部活動で使っているグラウンドを横切ったため、この教諭が注意した。(読売 2002.12.26)
- (33) 小金井署の調べによると、荒井さんは植木畑の隣の墓地に墓参りに行く際、近道をしようと畑を横切り、誤って転落したらしい。(読売 1996.07.19)

「部活動」「農作物を作ること」が「グラウンド」「畑」の主目的であるのに、その空間を別の目的で移動することが「横切る」によって表されている。<sup>11)</sup>

「横切る」は、「実際に(移動を含む)何らかの行動が展開されている空間をその行動を遮るように移動すること」を表すわけではなく、「(移動を含む)何らかの主たる行動を想定し、その想定される行動を遮るかのように移動すること」を表す。つまり、「横切る」の移動領域(経路)は、「(移動を含む)何らかの主たる行動が想定される空間である」と捉えられた空間である。

このように、我々は物理的空間に対し、(移動を含む)何らかの行動を想定する。「想定する」というのは、人によって異なり得るという意味で、主観的な営みである。その主観的捉え方が、移動の「横切る」という言語化に反映されていると言える<sup>12)</sup>。(17)(18)の「公園を横切る」という例に戻れば、この言語化には、話者の「公園」は言語化の対象となる移動のために存在する空間ではない。他の目的があって存在するものである」という主観的捉え方を踏まえ、「他の主たる行動が想定される空間を移動する」ことが表されていると言える。

最後に、「横断歩道を横切る」という例について、再考したい。移動の方向が特定されるような文脈がない場合に、「歩行者の移動」(先に掲げた(24)の例)と「車の移動」(先に掲げた(25)の例)のいずれに解釈するだろうか。「車の移動」としての解釈が想起されやすいのではないだろうか。一般的に、「横断歩道」というのは歩行者のためにあり、優先されるべきは「横断歩道と交差する車の移動」ではなく、「横断歩道に沿った歩行者の移動」である。いずれの解釈においても、言語化された移動とは別の移動が想定されているわけだが、常識的には「主たる移動」が「歩行者の移動」であるために、「車の移動」として解釈されやすい。また、「歩行者の移動」としての解釈は、横断歩道と道の隣接性に基づいたメトニミーにより「横断歩道で道を横切る」ことが表されているという解釈であることも関係していると考えられる。

## 5. おわりに

以上、本稿は、経路位置関係を包入する移動動詞「出る」「入る」「横切る」を対象とし、これらの動詞の意味に反映された「話者の物理的空間の捉え方」を考察した。そして、これらの動詞は、経路（移動領域）の特性を表すが、その特性は物理的空間が内在させているものではなく、話者が主観的に解釈して見出すものであることを明らかにした。本稿の考察は、認知言語学の「概念主義」「経験基盤主義」に基づくものであるが、その理論的立場の妥当性を示す事例研究になったのではないかと考える。

## 注

- 1) 認知言語学の概念主義的意味観に基づく。概念主義とは、「意味とは概念化（心的経験）である」（Langacker 1988）とする立場であり、客観主義に対立する主観的性質が強調される。この概念主義は、辻（編）（2002：23）において、「意味とは、客観的事実のコピーではなく、それを基礎にしながらか概念主体がどのように概念化したかに依存する、というのが概念主義の意味観である。したがって、現実世界における客観的な事実と異なる様式で概念化されることも当然ありうるし、客観的には同一の状況でも解釈が異なれば異なる方法で描写される。こうした概念主義の考え方は、身体性や個人の経験に依存する点で、経験基盤主義と不可分の関係にある。」と説明されている。「経験基盤主義」については、注6を参照のこと。
- 2) 引用例の後の（ ）に出典を記す。例文に施した下線は引用者によるものである。
- 3) 方向性を包入したものとしては、「行く、来る、登る、下る、上がる、下がる、降りる、落ちる、沈む、戻る、帰る、進む」の12語が挙げられている。
- 4) 小泉（他編）（1989）は、「入る」の意味・文型を10に分類し、「出る」の意味・文型を13に分類して記述している。本稿の分析に関わる第一の意味・文型のみを引用した。
- 5) プロトタイプは、カテゴリーの中心的で典型的なメンバーであり、カテゴリーのメンバーとして想起されやすい。
- 6) 経験的知識というのは、ある物事を（直接的、ないしは、間接的に）経験することによって蓄積される、その物事にまつわる様々な知識である。意味について概念主義、経験基盤主義の立場をとる認知言語学では、事態の概念化に際し、経験的知

識も重要な役割を果たすと考える。Lakoff(1987:266-267)は、「経験基盤主義の意味へのアプローチは、非常に一般的な概略を述べると、客観主義のアプローチと対照をなすものである。客観主義は思考する人間の性質及び経験から独立させて意味を定義するが、経験に基づく実在論は、意味を身体化に基づいて特徴づける。すなわち、われわれのさまざまな生物学的能力、及び、われわれを取り巻く環境の中で機能する人間としてのわれわれの身体的、社会的経験に基づいて特徴づける。」

(池上・河上(他訳)1993)と述べている。

- 7) (10) のような経験的知識は、決して完全にリスト化できるものではなく、「開いた」知識である。また、「中」として捉えられる物理的空間に、(a) - (g) の全ての性質を認められるわけではない。カテゴリーの周辺メンバーは、プロトタイプから何らかの点で逸脱していると考えられる。
- 8) 「読売」はインターネットの「ヨミダス文書館」において検索された「読売新聞」の実例であることを指す。
- 9) 『広辞苑』(第五版)、『新明解国語辞典』(第六版)を参照した。
- 10) 検索エンジンYAHOO!により検索された実例には、そのURLを記した。
- 11) 「横」が「横取り、横やり、横しま、横恋慕」のように使われ、「正しくないこと」「無理にすること」を表すことにつながる。国広(1982)には、「ヨコには<好ましくない行動>という含みを持った比喩的用法が多い。」「これはおそらく、人間の進行方向はつねにタテ<sub>2</sub>であるために、タテ<sub>2</sub>が正常な方向>というニュアンスを帯びてとらえられているためであろう。」(p.240)という指摘がある。「タテ<sub>2</sub>」は、「<垂直な姿勢の話し手を基準にした前後方向>」(p.235)と記述されている。
- 12) 「渡る」は「横切る」の類義語であり、客観的には同一の移動を「道を渡る」とも「道を横切る」とも言語化できる。鷺見(2003)は、「渡る」の意味を考察し、「「わたる」は、ある領域を通過することを概念化するのに用いられる。ただし、その領域が、「二つの空間に挟まれた領域」であり、両側がその領域を挟む二つの空間と接しているものと捉えられたときに使用される。」(p.128)と結論づけている。「道を渡る」と「道を横切る」は、物理的空間「道」の捉え方の違いを基盤としていることが確認できる。

## 参考文献

- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』 松柏社.
- 国広哲弥 (1982) 「タテ・ヨコ」 国広哲弥 (編) 『ことばの意味 3 辞書に書いてないこと』 平凡社、233-240.
- 小泉保 (他編) (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店.
- 鷺見幸美 (2003) 「移動を表す日本語動詞の意味と格表示—「わたる」を例として—」 『中部大学人文学部研究論集』 第 10 号、113-132.
- 鷺見幸美 (2005) 「移動を表す類義表現」 『日本認知言語学会論文集』 第 5 巻、584-587.
- 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社.
- 辻幸夫 (編) (2003) 『認知言語学への招待』 (シリーズ認知言語学入門第 1 巻) 大修館書店.
- 早瀬尚子・堀田優子 (2005) 『認知文法の新展開 カテゴリー化と用法基盤モデル』 (英語学モノグラフシリーズ 19) 研究社.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 中右実 (編) 『空間と移動の表現』 (日英比較選書 6) 研究社、125-230.
- 松本曜 (編) (2003) 『認知意味論』 (シリーズ認知言語学入門第 3 巻) 大修館書店.
- Lakoff, George. (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago : The University of Chicago Press. [池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知言語学の発展』、紀伊國屋書店.]
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. I*. Stanford : Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1988) A View of Linguistic semantics. In *Topics in Cognitive Linguistics*, ed. Brygida Rudzka-Ostyn, 49-90. Amsterdam / Phil.: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and symbol : The Cognitive basis of Grammar*. Brrlin・New York : Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In *Usage-based models of language*, eds. by Michael Barlow, and Suzanne Kemmer, 1-63. Stanford, California: CSLI Publications. [坪井栄治郎訳 (2000) 「動的使用依拠モデル」 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 ひつじ書房、61-143.]